

国立国語研究所学術情報リポジトリ

The research project "The Noun in the Lexicon"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: マティセン, ヨハナ, Mattissen, Johanna メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001971

「レキシコンにおける名詞」プロジェクトについて

ヨハナ・マティセン

(ケルン大学言語学科)

1. プロジェクトの構成と目的

デュッセルドルフ大学、ヴッパータール大学及びケルン大学では、ドイツ学術振興会 (Deutsche Forschungsgemeinschaft) の援助をうけて、1991年より「レキシコンの理論」(Theorie des Lexikons) というテーマの特別重点研究をおこなっている。このプロジェクトは、語彙範疇の構造、レキシコンとシンタクスの関係、形態論と語形成、語彙の意味構造化などの様々なテーマにとりくむ13の小プロジェクトから構成されている。

ケルン大学言語学科はそのプロジェクトの一部である「レキシコンにおける名詞」(Das Nomen im Lexikon)に参加しており、5人の言語学者 (Sasse, Broschart, Löbel, Mattissen, Genç) が「名詞」という語彙範疇について研究をおこなっている (1998年まで)。この研究では、系統関係や資料の豊富さなどを考慮して選ばれた約30言語をサンプルとして、類型論及び機能論的な観点、ならびに生成文法的な観点にもとづいた名詞の理論を構築することを目的としている。

分析の対象として選ばれた言語は、類型論的にみても一方の極に位置するとみられる言語である。具体的には、カヌーガ語 (イロコイ語族)、トンガ語 (ポリネシア諸語)、タガログ語、ギリシャ語、ベトナム語、オーストラリア諸語、スワヒリ語、グリーンランド語、トルコ語、ギリヤーク語などである。日本語もこの中に含まれる。

中心的な課題は次の二つである。

I : 語彙範疇としての「名詞」「動詞」の区別。

II : 語彙範疇としての「名詞」(N) と統語範疇としての「名詞句」(NP) との区別。

研究成果として、各言語の簡単な文法書 (grammatical sketch) と、カヌーガ語 (Sasse 1993a)、トンガ語 (Broschart 1995)、日本語 (Mattissen 1995)、ベトナム語 (Löbel 1996)、ヌングブヤン語群・カヤルディルド語 (Schultze-Berndt 1993)、ラコタ語・ブラックフット語 (Pustet 1993) に関する詳細な報告が公刊されている。

2. 議論の出発点

先にあげた二つの課題は、「名詞」「動詞」という範疇が言語普遍的な (どの言語も共通にもっている) 範疇とみなされているという現状認識にもとづいている。そもそも語彙範疇というものが設定できるのかということも議論の余地があるが、そのような問題が意識にのぼることはまれである。

それでも、1960年代以降、いくつかの研究 (例えば、Robins 1965, Lyons 1977, Miller 1985) では、

範疇の概念を単純に他言語に適用することにより困難が生ずることが指摘されてはいる。しかし、これらの研究は名詞・動詞という範疇がもつ特徴について述べているだけで、我々が問題にしている「名詞・動詞という範疇は言語普遍的な範疇か」ということは問題にされていない。

範疇概念を他言語に適用することの困難さは次の二つのことに由来する (Sasse 1993a:189, 192)。

- 1) 「名詞」「動詞」という伝統的な概念は、特定の言語 (具体的には古代ギリシャ語) の体系を記述するためにたてられたものである。
- 2) 「名詞」「動詞」はそれぞれ複数の素性の束によって特徴づけられているが、語彙範疇としての「名詞」「動詞」は事実上ひとまとまりの (holistic) 概念として扱われている。

さらに、名詞と動詞という概念を特徴づける素性にも、語彙的、統語的、存在論的 (ontological) な素性、現実の発話の中での使われ方にかかわる運用レベルの素性、というように様々なレベルがある (Sasse 1993a:196)。

古代ギリシャ語の名詞あるいは動詞が示す諸特徴はあくまで古代ギリシャ語という個別言語における特徴であるから、「名詞」「動詞」という概念をすべての言語に適用するのは不適切である。しかし、このことははっきりと意識されることはなかった。それは、古代ギリシャ語における範疇の概念は現代の平均的なヨーロッパ言語 (Standard Average European Languages, 以下SAE言語) に容易に適用できるという意識があったからである。また、印欧語族という同系統の言語に共通に適用できるからといって、その概念が普遍的であるとはいえないが、このようなことも普通は意識にはのぼりにくい。というのは、古代ギリシャ語の名詞や動詞と何らかのレベルで似た特徴をもった要素がほとんどの言語において見いだされるからである。このことは一見、範疇の他言語への適用、例えばある言語A (例えば英語) で別の言語B (例えばトンガ語) の体系を記述する場合、言語Aで名詞として翻訳される言語Bの語彙素はすべて名詞として分類するといったことを許すようにも見える。しかし、ここで方法論的な誤りが生ずる危険性がある。その誤りを明確にするために、Sasse (1993a:196ff) は伝統的な範疇というものの解体を試みている。

3. 伝統的な「品詞」の解体

伝統的な概念としての「品詞」は、語彙的な素性、統語的な素性、存在論的な素性、さらには運用レベルの素性というように様々なレベルの素性の束によって特徴づけられている。これに対し、我々の研究は、これらの四つのレベルを明確に区別しつつ、サンプルとされた言語にそれらの特徴に相当するものがあるかどうかを検討することからスタートしている。

Sasse (1993a:196ff) によれば、言語記述のレベルは次の四つのパラメータによって区別される。

1. 形式的パラメータ (パラダイムの存在)

語彙範疇は、互いに置き換え可能な構造体全体から構成されるパラダイムによって規定される。つまり、語彙範疇が異なるということはパラダイムが異なるということである。パラダイムの構成に関与するのは主に屈折形であるが、屈折形態素をもたない言語においては、分布、場合によっては範疇をかえる派生のメカニズムを考慮に入れてパラダイムを考える必要がある。その際、パラダイム全体として区別があるかぎりには、同一の形式が複数のパラダイムに現れるということが

あってもよい。(例えば、トルコ語における複数形態素、グリーンランド語における人称・所有マーカ―。Sasse 1993a:194 参照)。「性、数、格」にもとづくパラダイムと「人称、態、時制/アスペクト、法」にもとづくパラダイムとが相補的な関係にあるというSAE言語に典型的にみられるケースは、類型論的にみればひとつの特殊なケースにすぎない (Sasse 1993a:190)。

2. 統語的パラメータ (スロットとしての統語範疇と補充要素 filler としての語彙範疇との潜在的な対応関係)

語彙素においては、ある特定の統語的な位置 (統語スロット) には生起するがそれ以外の位置には生起しないということが決まっていることがある。ただし、その統語範疇というものは、その形式と機能にもとづき、各言語ごとに語彙範疇から独立した範疇として規定されなければならない (Sasse 1993a:201)。このことについては後述する。

3. 存在論的/意味論的パラメータ (意味範疇の分類)

このパラメータは、形式的に規定可能な語彙範疇と、存在論的範疇 (すなわち概念のクラス) との間の体系的な相関関係にもとづくものである (Sasse 1993a:202)。語彙範疇の区別は何らかの存在論的範疇の区別を基盤としているということは普遍的であると見られるが、概念化のあり方、そしてその結果としてのひとつの言語における存在論的範疇の種類というものは言語によって異なる。

4. 運用的パラメータ: 基本的な談話操作の分類 (指示対象の同定, 述語づけ, 修飾)

このパラメータは、前方照応ができるか否か、数詞と限定辞 (Sasse 1993a:203) が共起できるか否か、述部マーカ―が義務的か否かといったことと関連する。

ところで、これら四つのレベルを分けない品詞理論の構築をめざすアプローチがある。そこでは、特に語彙範疇と統語範疇とが区別されない (Croft 1991 は “syntactic categories” という言い方を用いている)。このアプローチでは、名詞と動詞の概念が、特定の語彙意味論的 (例えば、物vs.行為) 及び統語一運用的 (例えば、指示対象を同定する項vs.述部) な機能のプロトタイプと結びつけられている (Croft 1991 は例えば “a natural link between object and reference” ということをいっている。Hopper and Thompson 1984 も参照のこと)。このような見方は、特に屈折形態素をほとんど、あるいはまったく持たない言語に対してなされる。

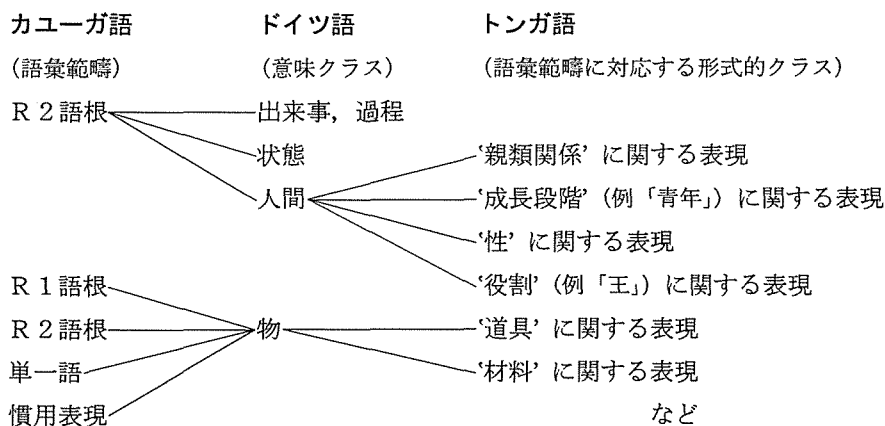
しかし、このような見方に対しては、次のような批判が可能である (Sasse 1993b:653ff)。

3.1. 意味にもとづく品詞の概念を他言語に適用することの問題点

意味にもとづく範疇の分類は、異なる言語の間で翻訳上対応関係にあるものは同一の範疇に属するという想定にもとづいている。このような想定にたつと、例えば、物を指示する言語要素は言語の違いに関係なく名詞として分類されることになる (Sasse 1993a:194)。

このようなアプローチは二つの理由から方法論的に不適切である。第一に、概念化の様式は言語ごとに異なるのであり、言語普遍的な存在論的 (意味論的) 範疇というものは存在しない。SAE言語においてさえも、語彙範疇と重複なく一対一対応する意味クラスというものを想定することはできない。第二に、SAE言語という枠の中で一般化された存在論的範疇を他言語に適用する場

合でも、言語横断的な比較対照をやってみると、意味範疇と語彙範疇との間にきれいな相関関係がないことが明らかになる（例えば、Croft 1991, Dixon 1982）。一例として、ドイツ語、カヌーガ語、トンガ語の比較を以下に示す（Sasse 1993a:214, Broschart 1995:53）。



(注：R 2 語根は R 1 語根を包含する語根，R1語根はR2語根に包含される語根)

3.2. 統語範疇の特徴にもとづいて語彙範疇を設定することの問題点

形態－語彙レベルの区別にかかわる特徴がない言語の場合、先に述べたアプローチでは、ある語彙素が冠詞フレーズ (article phrase) や項フレーズ (argument phrase)、あるいは‘時制-アスペクト-法’要素 (以下TAM) や述語のフレーズといった統語範疇をうめる補充要素 filler として現れれば、その語彙素は語彙的な名詞あるいは動詞として分類されることになる (Sasse 1993a:193)。

これに対し、Sasse (1993a:199ff) は、(項フレーズ、述部フレーズといった) 統語範疇の区別は語彙範疇の区別からは独立していることを示している。スロットとしての統語範疇と補充要素としての語彙範疇の間に相関関係があってもよいが、なければならぬというものではない。

このような相関関係は、SAE言語、とりわけ英語においてはきわめて強い形で存在する。すなわち、ある統語範疇 (例えばNP) は補充要素として特定の語彙範疇 (例えばN) を要求するけれども、別の統語範疇は別の語彙範疇を要求する。

しかし、このような相関関係も、世界の言語において見ることができる次の四つのケースのうちの一つにすぎない (Sasse 1993a:200)。

	語彙範疇の区別	統語範疇の区別	相関関係
タイプA	あり	あり	あり
タイプB	あり	あり	なし
タイプC	あり	なし	—
タイプD	なし	あり	—

タイプAの例としては、SAE言語 (例えばドイツ語) ならびにスワヒリ語、日本語があげられる。

語彙範疇と統語範疇の両方があり、かつ特定の語彙範疇と特定の統語範疇との間にスロットと補充要素の関係がなりたつ。つまり、統語範疇Ⅰは語彙範疇Ⅰを補充要素として要求するが（例えばN-NP）、統語範疇Ⅱは別の語彙範疇Ⅱを要求する（例えばV-VP）といった具合である。

タイプBはナマ語（コイサン語族）、タガログ語に代表されるようである。おそらく他のオーストロネシア諸言語もここに属するだろう。この場合、語彙範疇と統語範疇（例えばタガログ語ではangフレーズ）はあるが、特定の種類の語彙範疇が特定の種類の統語範疇の補充要素になるという傾向はない。

タイプCに属する言語にはカユーガ語がある（Sasse 1993a）。この場合、異なるいくつかの語彙範疇（後述）はあるが統語範疇がない。そのため、相関関係の有無も問題にできない。

タイプDにはトンガ語（ポリネシア諸語、Broschart 1995）がある。トンガ語には冠詞フレーズとTAMフレーズという二つの統語範疇があり、すべての語彙素はいずれの統語範疇にも入ることができる（後述）。また、語彙素においては、連続性をともなう細分化された弁別的パラダイムが多量に存在するため、大きなまとまりとしての語彙範疇を同定することは不可能である（Broschart 1995:53, 96, 99）。

語彙範疇と統語範疇の独立性は、語彙的及び統語的なレベルから別々に説明されなければならない。統語レベルのスロットと語彙レベルの補充要素の間にどのような相関関係があるかは個別言語的な問題であるから、語彙的な性質を統語的な性質におきかえて、あるいは統語的な性質を語彙的な性質におきかえて説明することはできない。さらにいえば、統語範疇のレベルで語彙範疇の区別を導入することは方法論的に不適切である。語彙レベルにおける形態上・分布上の区別がなければ、対応する語彙範疇もないのである（Sasse 1993:199）。ある語彙要素が冠詞フレーズに生起する、あるいは主語として機能するからといって、その語彙要素が名詞という範疇に属するとは限らないのである。

4. 個々の言語の体系に内在する範疇化のあり方、「名詞／動詞」の区別にもとづく構造とは別の構造

我々の研究は、前節で示した基準とその束における変異幅に関する調査から始まっている。すなわち、サンプルとなった言語について、SAE言語における名詞・動詞と同じ（あるいは比較可能な）語彙範疇があるか否か、統語範疇としての名詞句と動詞句があるかどうか、そして語彙範疇と統語範疇との間に一定の相関関係があるか否かということが調べられた。

4.1. 範疇の等価性

カユーガ語（イロコイ語族）、トンガ語（ポリネシア語族）、タガログ語などの言語には、範疇化に関して著しい差異が認められた。一方、日本語やグリーンランド語にはSAE言語と基本的には類似の範疇がある。

カユーガ語に対して、Sasse（1993a:208）は次のような語彙範疇をたてた。

- ・単一語（Simplizia）（屈折なし）

- ・ R1語根 (R1-Wurzeln) (被抱合語根：限定的な屈折パラダイムあり)
- ・ R2語根 (R2-Wurzeln) (抱合語根：完全な屈折パラダイムあり)
- ・ 慣用形式 (完全に語彙化された形式。単語内の一部だけが変化可能)

SAE言語では名詞として翻訳される要素は、すべてこれらの4つのクラスに分類される (Sasse 1993a:218)。よって、語彙範疇は存在するが、名詞や動詞といったタイプの範疇は存在しない。さらに、名詞句や動詞句といった句も存在せず、そのかわりに代名詞的接辞が対象の指示同定の機能を、語根が述部づけの機能をなう抱合的な構造体が存在する。

トンガ語には冠詞フレーズとTAMフレーズがあり、両者ともすべての語彙素を補充要素としてとることができる (Broschart 1995)。そして、語彙素の下位分類は、内在する関係性 (例えば、所有者の表示が義務的か否か)、修飾構造、複数標識、連続性といった二次的な判断基準によってのみ可能である (Broschart 1995:52ff)。これらの間には多数の中間的な段階がある。

4.2. 個々の言語の体系に内在する範疇化のあり方

我々の研究で明らかになったことは、語彙範疇化の体系は個別言語に固有なものだということである。主要な語彙範疇の数、範疇内部での同質性や下位範疇への分類、ならびに語彙範疇 (あるいはその下位範疇) と文法範疇とが相関関係にあるかどうかといったことは、個々の言語の体系に内在するものである。

実際、ある言語に“古典的”概念としての「名詞」「動詞」と同じ形態的、存在論的、統語的及び運用的な素性の束をもった範疇があったとしても、その範疇はその言語の体系内でしかるべき位置 (それはSAE言語において名詞や動詞がしめる位置とは異なるだろう) をしめることになる。例えば、日本語においては、屈折可能な内容語と屈折不可能な内容語という区別が内在的に存在する。屈折可能な内容語にはSAE言語の動詞に似た範疇があり、屈折不可能な内容語にはSAE言語の名詞と副詞に似た範疇がある。これに対し、グリーンランド語では主要な語彙範疇である名詞と動詞はいずれも屈折し、屈折しない小クラスとしての副詞と対立する。

類型論的な観点からすると、日本語は、語彙範疇の下位範疇がしめる位置において興味深い言語である。すなわち、比較的不等質の上位範疇である「体言」と「用言」が少数の一般的性質のみによって規定できるが、それぞれの範疇内では具体的な形態的な特徴によって下位の範疇が規定される (Mattissen 1995)。

語彙範疇の理論を構築をめざして言語間の比較対照をおこなう前に、個々の言語に内在する体系を詳細に記述、分析することが必要である。このような認識を通じて、我々のプロジェクトの重点は、範疇化及び下位範疇化に関する言語固有の体系を見いだすという作業におかれることになる。

4.3. 「名詞／動詞」の区別にもとづく構造とは別の構造

SAE言語では語彙範疇と統語範疇とが明確に区別されており、それらの間にスロットと補充要素という相関関係が見られるが、場合によっては語彙的な単位と統語的な句の単位とが同じ形を

とることがある。例えば、ラテン語の puella (少女) は、puella, puellae... という変化表中の語彙単位でもあるし、「一人の/その少女」(a/the girl) の意を表す最小の名詞句形式でもある。ラテン語は古典的な品詞言語 (word class language) である。

その一方で、内容語である語彙単位はタイプ (type) を表すだけで (例. トンガ語 *fefine* 'woman'), 実際の発話の中でトークン (token) を表すために用いられる場合は句の形にしなければならない (例. トンガ語 *e fefine* 'a/the woman', 冠詞フレーズ) 言語もある (Broschart 1995:105)。トンガ語では、語彙単位が最小の句形式と同じ形をとることはなく、語彙単位は2つの句型 (冠詞句とTAM句) の補充要素となりうる。

語彙単位 : *tangata* 'man', *lele* 'run'

句 : ...*e tangata* (冠詞 man) 'a man'

'*oku tangata* (現在 man) '(X) is male'

...*e lele* (冠詞 run) 'the act of running'

'*oku lele* (現在 run) '(X) runs' (Broschart 1995:18)

構造的なタイプとしてはさらに次のようなものもある (Broschart 1995)。統語範疇をもたない '語-文' 言語 (word-sentence language, 例えばカユーガ語), 派生言語 (derivational language, 例えばインドネシア語), 不変化詞言語 (particle language, 例えばラフ語, シナ・チベット語族), 語根屈折言語 (root-inflecting language, アラビア語), 統語言語 (syntax language, 統語レベルにおける範疇の区別はあるが, 語彙レベルの区別が貧弱な言語。例えばナマ語, タガログ語), 多機能言語 (multifunctional language, 例えばカヤルディルド語, トルコ語), そして, 歴史的にある型から別の型へと変化した混合型の言語 (例えば英語)。

5. まとめ

上で述べたように, 主要な語彙範疇である名詞と動詞の区別も, 主要な統語範疇である名詞句と動詞句の区別も普遍的なものではない。また, 語彙範疇と統語範疇の間に必ず「スロットー補充要素」という相関関係が成立するわけでもない。

本プロジェクトで調査対象となっているどの言語においても, それぞれの言語ごとに, 存在論的領域と相関関係をもって語彙素の範疇が区別されていることを示す現象がある。例えば, コピュラの付加の必要性, 述部における人称標識の有無, 時制標識の共起可能性など。これらの区別に関してどれだけのバリエーションがあるか, そして「名詞/動詞」の区別にもとづく構造とは異なる構造にどのようなものがあるかということが我々の研究の中心である。

我々は, サンプルとした言語について, 「単語vs. シンタグム」「語彙要素vs. 文法要素」「屈折vs. 派生」「パラダイムvs. シンタグム」「存在論的分類vs. 運用レベルの機能」の区別について分析をおこなっている。

残りの一年半では, これまで構築した, 語彙と統語の範疇化とその相関関係の枠組みにもとづいて言語を研究し, 研究書 (Broschart/Mattissen: *Beyond Nouns and Verbs: Typological Studies on Lexical Categorization*) としてまとめる予定である。今後特に重要な課題となるのは, 形容詞

に類似した範疇の存在を考慮した語彙範疇の下位分類であろう。

- Broschart, Jürgen 1991: "Noun, Verb and Participation". In: Seiler, Hansjakob / Premper, Waldfried (eds.): *Partizipation. Das sprachliche Erfassen von Sachverhalten* (Participation. Linguistic apprehension of states of affairs). Tübingen: Narr. p. 65-137
- Broschart, Jürgen 1995: "Why Tongan does it differently: Categorical Distinctions in a Language without Nouns and Verbs". To appear in: *Linguistic Typology* 1 (2) 1997
- Croft, William 1991: *Syntactic Categories and Grammatical Relations. The cognitive organization of information*. Chicago and London: University of Chicago Press
- Dixon, R. M. W. 1982: *Where have all the adjectives gone?* Berlin etc.: Mouton
- Hopper, Paul / Thompson, Sandra A. 1984: "The Discourse Basis for Lexical Categories in Universal Grammar". *Language* 60, 4. p. 703-752
- Löbel, Elisabeth 1996: *Klassifikatoren. Eine Fallstudie am Beispiel des Vietnamesischen* (Classifiers. The case of Vietnamese). Habilitationsschrift, Universität zu Köln (Habilitation thesis at the University of Cologne)
- Lyons, John 1977: *Semantics*. Vol. 2. Cambridge: CUP
- Mattissen, Johanna 1995: *Das Nomen im Japanischen - Abgrenzung und Subklassifizierung* (Delimiting and subcategorizing the noun in Japanese). Arbeiten des Sonderforschungsbereichs "Theorie des Lexikons" (Working Papers of the Special Research Project "Theory of the Lexicon") No. 65. Düsseldorf: Heinrich-Heine-Universität
- Miller, Jim 1985: *Semantics and Syntax: parallels and connections*. Cambridge: CUP
- Pustet, Regina 1993: *A preliminary survey of lexical class formation in Lakota*. Arbeiten des Sonderforschungsbereichs "Theorie des Lexikons" No. 35. Düsseldorf : Heinrich-Heine-Universität
- Robins, R.H. 1965 : *General Linguistics: An introductory survey*. London: Longmans
- Sasse, Hans-Jürgen 1993a : "Das Nomen - eine universale Kategorie?" (The noun - a universal category?). *Sprachtypologie und Universalienforschung* (STUF) 46 (3), p. 187-221
- Sasse, Hans-Jürgen 1993b: "Syntactic Categories and Subcategories". In: Jacobs, Joachim / von Stechow, Arnim / Sternefeld, Wolfgang / Vennemann, Theo (eds.): *Syntax*. Handbücher zur Sprach- und Kommunikationswissenschaft Vol. 9.1. Berlin, New York: De Gruyter. p. 646-686
- Schultze-Berndt, Eva 1993: *Nomen und Nominalphrase in zwei australischen Sprachen* (Noun and NP in two Australian languages). Arbeiten des Sonderforschungsbereichs "Theorie des Lexikons" No. 35. Düsseldorf: Heinrich-Heine-Universität

Johanna Mattissen : Institut für Sprachwissenschaft, Universität zu Köln
Albertus-Magnus-Platz, 50923 Köln
jmattissen@uni-koeln.de

※ヨハナ・マティセン氏は、国立国語研究所外国人招聘研究員として1996年8月から1997年3月まで国立国語研究所に滞在した。